ザッハー＝マゾッホのカルパチア

――『ハイダマク』をめぐって――

伊狩　裕

1.

カルパチア山脈は，ブラチスラヴァの北方から，C の文字を裏返した形でルーマニアとセルビア国境の鉄門峡谷まで伸びている。全長およそ 1300 キロメートル，地表を覆う面積はおよそ 20 万平方キロメートルに及び，長さにおいても広さにおいてもほぼ日本の本州を覆い尽くす。現在の地図で言えば，スロヴァキア，ポーランド，ウクライナ，ハンガリー，ルーマニアに跨っている。跨っている，とは言い換えれば，これらの国々を一つに繋ぎとめているということであるが，この「裏返しの＜ C ＞」を，地理的のみならず，歴史的，文化的，自然史的，宇宙論的に時空を繋ぎとめる「大きな鉤」と見立てるのは現代ウクライナの作家ユーリイ・アンドゥルホーヴィッチである。アンドゥルホーヴィッチの「カルパトロギア･コスモフィリカ――架空の地誌の試み」というエッセイによれば，「ヨーロッパの地理的な中心は，スタニスラウからおよそ 100 キロしか隔たっていないカルパチア山中にあるにもかかわらず」，カルパチアは，「ヨーロッパの意識のなかではつねに様々な帝国（ローマ，オスマン，ハプスブルク，ロシア，ソヴィエト）の境界，辺境，周縁であり，諸文化，諸文明の周縁」[1] であった。すなわち，「中心」とは同時に，「ヨーロッパのどの地域からも最も遠く隔たった」[2] 場所ということでもあり，「この裏返しの＜ C ＞は，すでにそれ自体が『周辺』，周縁の理念を象徴している。すなわちそこは文化的，政治的，地政学的な傾向，志向，そして影響とが重なり合う場所」[3] であり，「カルパチアは，カオス的崩壊を志向する存在の諸部分を一つに繋ぎとめる大きな鉤なのである」[4] とアンドゥルホーヴィッチは続ける。そこは，「ローマ世界とビザンチン世界の境界」であり，今日でも「トンネルやパイプラインの工事の際にトラヤヌス時代のローマの貨幣」が発見され，「ホティンの畑では，毎春そこを耕すときに，300 年前にポーランド人とコザックに虐殺されたトルコ人の髑髏が掘り起こされ」[5]，「1989 年の穏やかな秋には」，50 年前にソ連人によって射殺されたウクライナ人たちの遺骨がいくつもの古井戸からつぎつぎと発見され，それは大規模なデモを誘発し，

「ソ連支配の基礎に対する爆薬」[6] となったのであった。

アンドゥルホーヴィッチが，東カルパチアの，「正確に計測されたヨーロッパの地理的中心」[7] に佇んで，「未来についての特別なメタ科学であるカルパチア学」[8] に思いを馳せるのに先立つおよそ 120 年前に，ザッハー＝マゾッホ（Sacher-Masoch, Leopold von 1836-1895）の『ハイダマク』（Der Hajdamak. 1877）の語り手も同じ場所から，カルパチアが繋ぎとめている「二つの世界」を見下ろしていた。

> 太陽は，ここでは二つの世界，オリエントとオクシデントをその暖かい創造の光で満たしている。彼方には，まるで私たちの足下から深みへと砕け落ちる岩石のように風化した，疲弊したヨーロッパがあり，老齢と富につきものの苦しみをすべて背負った，病んだ諸国民がいる。そこには，計測されていないもの，計算されていないものは何一つなく，計量されていないもの，名付けられていないものも一つもない。それでも永遠のイシスは，克服されることも解読されることもなく，同情のこもった一千の眼で人間を見つめている。
>
> それに対して此方では，若々しい曙の諸民族が，創造の胸元に優しく抱かれ，その秘密の鼓動に無垢の感覚でもって耳を傾け，自然の必然と，永遠に変わることのない人類の運命の感情に満たされ，記憶に苛まれることも過去に怖気を振るうこともなく，また，儚い希望を抱くこともなく，しかしまた恐れと疑いを抱くこともなく未来を見つめている。[9]

すなわち，オクシデントでは，人間は自然を対象化し，計測し尽くし，分割し尽くし，命名し，己がものとし，その結果，「富」の所有を病んでいる。しかし自然，すなわちイシスは，克服されたわけではないし，解読されたわけでもない。逆にイシスは，「疲弊したヨーロッパ」の「病んだ諸国民」を哀れみのこもった眼差しで見つめている。他方オリエントでは，「若々しい曙の諸民族」が創造者イシスの「胸元に優しく抱かれ」，イシスの謎，すなわち「自然の必然」に溶け込み，創造されたままの自然のなかに生きている。『ハイダマク』の語り手の目には，この「二つの世界」が，カルパチアによって分割され一つに繋ぎとめられている。

アンドゥルホーヴィッチの「カルパチア学」に戻れば，山中に散らばる巻き貝，ウミユリ，魚の骨などの化石は，「カルパチアの海洋の過去」[10] を物語り，カルパチアの山中を歩くことは，「今はもう存在しない海底を歩く」[11] ことであり，現在を歩きながら同時に過去を歩くことになる。そしてカルパチアを宇宙へと繋いでいるのは，ゼンブラニア山近くに戦間期に造られ，かつては「天使たち，あるいは流星を観測していた」[12] 天文台の廃墟と，コスモスと押韻するフツーレの

村コスマチである。コスマチは 18 世紀の伝説的ハイダマク，オレクサ・ドウブシ[13] 最期の地でもあった。

2.

ザッハー＝マゾッホの『ハイダマク』は，ガリツィアの首都「ルヴフ」[14]，すなわちレンベルクから 3 人の有閑階級のポーランド人が，東カルパチア山中のチョルナ・ホラ（黒い山）を見るために，語り手「ザッハー＝マゾッホ」が住む山麓の町にやってくるところから始まる。すなわち，「気まぐれで，二つの瞳から小悪魔的な輝きを放ち，実に可愛らしく，優美で，落ち着つかず，そしておどけていて，ポーランド人でなければ子猫にしかなりようのない」貴族の令嬢ローラと，その侍女で，「いわばホルバインの聖母のように歪んだ退屈な眼のほかにはとくに目立ったところのない」ロドイスカ，それに彼らの護衛役として，「5000 年間どこかの傾いたピラミッドに横たわっていたエジプト王のミイラのように黄色い肌をした，一般には遠回しに『ソクラテスの顔』ということになっている猿顔の」[15] 自然研究家である中年の教授の 3 人である。その 3 人に，「われわれの地方の」[16] 外科医と助任司祭，それに語り手とその使用人のコザックが案内役として加わり，総勢 7 名で，「遊牧騎馬民族の性格をほとんど純粋に守ってきた」[17] カルパチアの山岳民族フツーレを訪ねることになる。主に説明役をつとめる「若くて利発な助任司祭」は，ことさらに「ジャビエの出身」[18] と明記されているが，ジャビエはフツーレ地域の中心として知られたカルパチア山中の村であるから，助任司祭自身もフツーレであると考えられる。

カルパチアとフツーレとが，周辺のドイツ人，ポーランド人，ウクライナ人の関心を引き始めるのは，アロイス・ヴォルダンの『文学におけるフツーレ』によれば 19 世紀前半からである。ガリツィアがオーストリア帝国に併合された 18 世紀末以来，カルパチアとそこに住む山岳民については，ドイツ人の旅行記などで表面的な記述はなされていたが，とくに関心を集めることもなかった。しかし 19 世紀に入り，ポーランド人，ウクライナ人の間にもロマン主義が伝播すると，「できるだけ手の加わっていない自然と，できるだけ人間の文明に侵されていない住民に対する偏愛」が高まり，「19 世紀前半にフツーレのモチーフを取り上げたポーランド人詩人たちは相当な数に上り，その大半は今日忘れ去られたとはいえ，たとえばレンベルクのアルメニア系のカロル・ボウォズ・アントニエヴィチ（1807-1852），あるいはスラヴの神にちなんで名付けられた『ジェヴォーナ』というグループに属する詩人たち，すなわちアウグスト・ビエロフキ（1806-1876），ルチアン・シエミエニスキ（1807-1877），そしてカジミエツ・ヴイチツキ（1807-1879）は，フツーレに関して，文学的のみならず民族誌的記述をも行った。同じ町レンベルクでは，若きポーランド人たちばかりでなく，ウク

ライナ人詩人たちも，初期のロマン主義的な意図から，自らの創作の源泉と模範を民謡に求めた。敵対者たちから『レンベルクの三位一体』と揶揄された，レンベルク大学ギリシャ･カトリック上級ゼミナールの神父志望学生マルキアン･シャシュケヴィッチ（1811-1843），イヴァン・ヴァヒレヴィチ（1811-1866），ヤキフ・ホロヴァツキイ（1814-1888）は，民謡を収集し，民謡風の詩を書き，自分たちの雑誌には民族誌的スケッチを付け加えた」[19]，とヴォルダンは述べる。フツーレをモチーフとした文学の頂点は，1844 年にレンベルクで初演されたユゼフ・コジェニョフスキの『カルパチアの山岳民』（Karpaccy górale）であった[20]。騙されて徴兵されたフツーレの若者が脱走兵となりカルパチア山中に逃れ，復讐のためにハイダマクに投じる物語は評判となり,「カルパチア」, そこの住民「フツーレ」，山中の義賊集団「ハイダマク」あるいは「オプリシュキ」は，文学の枠を越え一般にも耳目を集める表象となっていった。ザッハー＝マゾッホは，『ハイダマク』のほかにも『盗賊マガース』（Magaß, der Räuber. 1875）という短編でカルパチアのフツーレ，そしてハイダマクを扱っているが，そのなかでも，カルパチア近くに住む領主のもとへ家庭教師としてレンベルクから雇われてきた若い僧侶が，首都レンベルクの最新情報として，『クラクフ人と山岳民』という「ポーランド演劇」が評判になっている，と領主一家に伝えている[21]。

だが，『ハイダマク』において設定されているように，都市の有閑階級をカルパチアの山中にまで赴かせるには，さらに 19 世紀後半の，エキゾチズムに支えられたツーリズムや博覧会ブームも必要であった。クラクフからプシェミシルまで伸びていた鉄道がレンベルクに達するのは 1861 年のことであり，それがさらにチェルノヴィッツまで伸長するのは 1866 年である。1861 年には 465 キロにすぎなかったガリツィアの鉄道の総延長は，その後 10 年でおよそ 2 倍になる[22]。都市住民にとって外部の異質な世界，非日常的な風景が身近なものとなり，ハプスブルク帝国内の人と物と情報の流通が，量と速度を増した。博覧会は，鉄道の普及よりも早く，帝国内においては，すでに 1829 年から 1847 年にかけて，プラハ，ブリュン，クラーゲンフルト，グラーツ，ライバッハ，リンツにおいて，2, 3 年ごとに延べ 10 回開催され，そのブームの頂点をなしたのが，皇帝フランツ 1 世の提案で 1835 年にウィーンのホーフブルクの乗馬学校で開かれた博覧会であった。「だれもが，わが領邦各地の各種の産物を一望し，それらを手に入れることができ，それによって販売と交易を促進し，産業をますます盛んにするために」[23], というフランツ 1 世の趣意に示されているように, 19 世紀前半の博覧会は，殖産興業を目的とした産業博覧会であった。だが，1873 年にウィーンで開かれた万国博覧会では，「民族誌村」（das ethnographische Dorf）が作られ，「帝国内のさまざまな地域から集められた農家の展示は，その後の大規模博覧会に無数の模倣を見いだすばかりでなく，一定のテーマをもった野外博物館を生む」[24] ことになり, それまでの見本市的博覧会に民族誌的要素を付け加えたのであった。ウィー

ンの万国博覧会を受け，レンベルクで地方博覧会（Landesausstellung）[25] が開かれ，フツーレの農家風のパビリオンが造られ，カルパチアを訪れる機会のなかった市民たちも，再現されたその室内でフツーレの家具什器を実見し，噂に聞くだけであったフツーレの生活を疑似体験することができたのは，ウィーンの万国博覧会の 4 年後の 1877 年，すなわち，『ハイダマク』が出版された年であった。

ザッハー＝マゾッホが『ハイダマク』において，都会からやってきた 3 人のポーランド人たちの姿を借りて描いているのは，都市住民のエキゾチズムであり，疑似体験に飽きたらずに実体験を求めてカルパチアの山中にやってきたツーリストである。ガイドに導かれ博覧会のパビリオンに近づいてゆくように，一行は山中のフツーレの農家に近づいてゆき，「本物のフツーレの家」を子細に観察する。

> 「ここに年老いたハイダマクが住んでいます」と私のコザックがあらたまって小声で言い，心淋しいフツーレの屋敷を指さした。それは，険しく岩がちな丘の上に，鬱蒼と聳える樅の木々に包まれて横たわっていた。高い茨の生け垣が，横に広がるいくつかの家屋を取り巻いていた。それらの家屋は，太くて質感のある，灰黒色の四角い木材で組まれ，屋根は大きな剥板で葺かれていた。私たちの正面には，窓も，扉も，煙突もついていない背の低い小屋が横たわっていた。（……。）
>
> 私たちは敷地の中に入り，広い中庭によって納屋と家畜小屋から隔てられた母屋の巡りを回った。家畜小屋には菜園が接していた。母屋となる小屋には，鉄格子のはまった南向きの窓が二つと扉が二つついていた。窓の下には，木製の低い回廊が貯蔵室まで続いていた。東側にはミツバチの巣箱がいくつか置かれ，空気中では心地よいミツバチの羽音が鳴り響いていた。
>
> 「これが，私たちの本物のフツーレの家です」と助任司祭がいった。[26]

博覧会の見学者が，パビリオンのなかに入り，家具，調度などの民芸品を観察するように，一行は，かつて「本物の」ハイダマクであった，年老いたミコライの住まいの内部を隈無く見学する。

> 「ルヴフとは，ずいぶん遠くからいらしたもんだ」と彼（ミコライ――伊狩）は私たちを招じ入れ，二部屋に等分された彼の家を見せてくれた。居間には，暖を取るためというよりも肉を燻すために使われる大きな暖炉があり，その隣には，大きな花が描かれた，重そうな白い戸棚が据えられていた。壁に沿って幅の広いベンチがめぐらされ，一方の隅には大きなベッドが一つ見え，その横には戸棚と同じ造りの長持があり，部屋の真ん中にはがっしりとした荒削りなテーブルが置かれていた。ドアの

一つは，フツーレたちが盛装を保管するコモーラ（納戸）であった。右の部屋は，我々の山岳民の家ではどこもそうなのだが，客間となっていた。その部屋に足を踏み入れると，壁の中央の立派な戦利品が目に飛び込んできた。トルコ風ダマスク鋼の銃2丁が，1対の見事なアルナウテンのピストルの上で交差し，ピストルからは，木製の火薬筒，トールバ（バッグ），そしてトポール（フツーレの手斧。一種の長いトマホーク）が吊り下げられていた。どの部屋の壁も塗料は塗られてはおらず，丁寧になめらかに削って仕上げられていた。天井も床もそうであった。ドアにはヒマラヤ杉の重い棒で閂が掛けられていた。皿，スプーン，フォークは菩提樹を巧みに削って作ったものであった。家中が明るい清潔感と，茶色い木の感触に等しく支配されていた。壁のあちこちに掛けられた，黄変した数々のイコンのなかでも，聖ニコラウスのイコンが，その大きさとビザンチン風の金地によってとくに秀でていた。[27)]

レンベルクの地方博覧会でフツーレのパビリオンを訪れた市民たちも，おそらく同じ眼差しでフツーレの民芸的家具調度を眺めていたはずである。

一行は，この先ミコライの案内で，チョルナ・ホラへ赴くことになるが，ミコライが身支度を調え，「フツーレの戦士の完全な出立ち」で現れると，民族衣装の細部がさらに精緻に観察される。

目の粗い，しかし清潔そうな，襟のないシャツは色とりどりの花の刺繍が施され，小さな真鍮の留め金一つで合わせられていたが，丈は短く，彼の腰までしかなかったので，動くたびに真鍮のボタンで飾られたベルトの両側に，日焼けした彼の体が見えた。幅広の青い布製のズボンは赤い靴下の上で括られ，小さな足は生革のホダーキ（農民靴）に収まっていた。彼は前の開いた茶色い上着の上から，青い紐飾りのついた深紅のサルダーク（フツーレの外套）をドルマンのように肩に羽織っていた。胸の上で交差する，輝く金属が散りばめられた4本の幅広のベルトが，彼の見事な胸郭をローマ人の鎧のように護っていた。

ベルトには，ピストルと，短剣のようなナイフが差し挟まれ，ハンガリー・タバコが詰まった豚の膀胱，真鍮の蓋のついた小さな木製のパイプ，火打ち石が小さな鎖で吊り下げられていた。右肩から左へ，方形の紋様が縫い取られたトールバが下げられ，逆に，真鍮の鋲と骨で装飾された木製の火薬筒がそれに交差し，そして胸の中央には大きな真鍮の十字架がつり下げられていた。彼はプーシカ（猟銃）を肩に担ぎ，真鍮の鋲，貨幣，鷲の羽で飾られた鍔広のフェルト帽を目深に被り，右手にはトポールを持ち，その鋭い刃は威嚇的な輝きを放ち，

リクトルの斧を彷彿させた。[28)]

博覧会見学者の民族誌的リアリズムは，精緻を極めれば極めるほど，かつてドボシュの配下で義賊としてポーランド人貴族たちを襲い，彼らに恐れられていたミコライから，ハイダマクとしての主体を奪ってゆき，彼を民芸品のなかに埋没させる。緻密な描写はザッハー＝マゾッホの持ち前で，同じフツーレ，あるいはハイダマクを対象としても，同時代のフランツォース（Franzos, Karl Emil 1848-1904）の作品，たとえば『権利のための闘争』（Ein Kampf ums Recht. 1882）においては，このように細密な描写に出会うことはない。ザッハー＝マゾッホ自身，『ハイダマク』を収めた短編集『財産』（Das Eigenthum. 1877）の「序」で，「この流派（リアリズム――伊狩）の，もっとも興味深く，もっとも重要な代表者はガリツィア出身の小ロシア人ザッハー＝マゾッホ氏である。彼はドイツ語で書き，自分の言葉を熟知し，その文体は洗練されており，色彩と形象に満ちている」[29)] というフランスの『両世界評論』の書評を引用しながら，自らの先駆性がドイツよりはフランスで高く評価されていると強調する。ここでの描写の精緻は 3 人のポーランド人ツーリストのエキゾチズムの強さに応じたものである。

西欧都市住民の，異文化，異民族への好奇心はツーリズム，博覧会によっていっそう刺激され，文化産業の一角に民族展示（Völkerausstellung）や民族ショー（Völkerschau）を成り立たせる。ハンブルクの動物輸入業者ハーゲンベック（Hagenbeck, Carl 1844-1913）が，ラップランド人を，トナカイ，テント，橇，武器，家具調度ごと運び，彼の動物展示広場で展示し，組織的な民族展示を開始したのもこの頃，すなわち 1875 年であった。「すでに開場日の朝早くから見物人たちが押し寄せ，……群衆は危険な様相を呈し始め……ついには見物人たちの入場を制限するために警察隊の出動を要請するほかなかった」[30)] というほどの大盛況で，ハーゲンベックは，この催しを，ベルリン，ライプツィヒへ巡回させ，翌 1876 年にはスーダンから連れてきたヌビア人を，同じくハンブルクの彼の動物展示広場の柵の中で，「野蛮人」（Wilde），「未開人」（Primitive）として展示する。ドレースバッハによれば，民族展示はその後，半世紀以上にわたって続き，興業者も数を加え，ドイツ国内ばかりでなく，バーゼル，ベルゲン，イェーテボリ，コペンハーゲン，ロンドン，ミラノ，パリ，ブダペスト，プラハでも行われ，動物園，パノプティクム（ベルリン），サーカス，オクトーバーフェスト（ミュンヒェン）をはじめとし，各地の歳の市で不可欠の催しとなってゆき，「『自然民族(Naturvölker)』も『文化民族（Kulturvölker)』も，『ホッテントット』も『日本人(Japanese)』も展示された」[31)] のであった。

フツーレの盛装に無邪気に燥ぐローラとロドイスカの前でミコライは民族展示された人間，あるいは博物館の剥製かパノプティクムの蝋人形と化している。

「ああ，なんと見事な姿でしょう」と若いポーランド人の女（ローラ――伊狩）は叫び，「本物の騎士だわ！」と言いながら，火薬筒と鎖をいじり始めたが，ロドイスカ嬢のほうは，うやうやしく控えていた。
「すごい格好だわ」とロドイスカはつぶやき，フツーレの赤い靴下を見ながら言った，「なんてロマンチックなんでしょう。本物の盗賊の衣装だわ。まるで血の中を歩いてきたように見えません？」
彼女は彼の手を掴み，一般に残忍な人間の指とされている，短くて丸い指をそこに探したが見出すことができなかったので，今度は素早くハイダマクの後ろのベンチに飛び乗り，あっという間に彼の頭を調べ始めた。「ここにあったわ」，と彼女は勝ち誇ったように叫んだ。「まるで丘ね，いえ，山だわ！」
「何のことです？」と外科医が驚いて尋ねた。
「殺人感覚よ」と，ロマンチックな女性はフランス語で答え，大げさな身振りでベンチから下りた。
「あなたはたくさんの人間を殺したんでしょうね？」と彼女は身震いしながらかつての盗賊に尋ねた。
彼はそれには答えず，前庭に歩み出た。[32)]

ドレースバッハは，民族展示の演出を，展示される民族の日常をできる限り自然のまま再現して見せる民族展示，何らかの演出が加えられた民族ショー，そして身体の異形を中心に据えたフリーク・ショー，とほぼその変遷に従って 3 分している[33)]が，あろうはずもない身体の異形を弄るロドイスカはすでにフリーク・ショーの観客のカリカチュアとなっている。

このあと一行は，ミコライに借りたフツーレ馬に乗ってチョルナ･ホラを目指しカルパチアの山中を縦走してゆくが，道中の風景，植物相，そして地形も，フツーレの民族衣装と同じ精度で描写されていく。そして，遠方に初めて，「同胞 27 の峰々を遙かに圧倒し，3 つの威嚇的な尖峰を持ち，崩れ落ちた巨人の城の黒い塔にも似たチョルナ･ホラ」が姿を現したとき，ポーランド人たちは，「神の全能！」，「すばらしいわ（Merveilleux）！」，「なんて見事なんでしょう（Admirable）！」「圧倒的だ！」，「壮大だ！」，「比べようがないわ（sans pareille）！」，「自然の奇蹟！」，「絵のようだ，本当に絵のようだ！」と思いつく限りの賛辞を並べた後，語り手に向かって，「なぜそんなに冷静にしていられるんです，ザッハー＝マゾッホさん？」[34)]と問いかけるが，この問いに答えはない。

3.

作者ザッハー＝マゾッホにとって，カルパチアを含むガリツィアは故郷といっ

てよい土地であったことを，彼は『回想』（Souvenirs. 1985）のなかのいくつかの自伝的文章において語っている。ザッハー＝マゾッホは，ハプスブルク帝国のドイツ人官吏，すなわちレンベルクの警察長官を父に，「小ロシア人貴族」[35] を母に生まれたが，もっぱらウクライナ人の乳母ハンジャの手で育てられた。自ら「私の二人目の母」[36] と呼ぶハンジャの母乳とともにザッハー＝マゾッホが飲み込んだのは，「ロシア民族への愛，私の土地，私の故郷への愛，そして私がすべての詩人たち，とくにロシアの詩人たちと分かち持っている農民への愛」であり，その結果，「私の両親の家では，おもにポーランド語，ドイツ語，フランス語が話されていたにもかかわらず，私が最初に覚えた言葉は，私の乳母のおかげでロシア語となった」[37]，とザッハー＝マゾッホは回想している。ザッハー＝マゾッホが語る「ロシア」は「小ロシア（ウクライナ）」を排除するロシアではなく，小ロシアをも含んだロシアである。乳母ハンジャも，ときにロシア人と表現されたり（「ハンジャは純粋なロシア人であった」[38]），あるいは小ロシア人とも呼ばれている（「レンベルク近郷の小ロシア人の農婦であった私の乳母」[39]）が，当時「小ロシア（人）」を「ロシア（人）」と言い得ても，逆はあり得ない。今日風にロシアとウクライナを区別するならばハンジャがウクライナ人であり，従ってザッハー＝マゾッホが「最初に覚えた言葉」がウクライナ語であったことは，なによりも「ハンジャ」（Handscha）[40] という彼女の名前が雄弁に語っている。ハンジャがロシア人であったならば「ガンジャ」と名乗り，ザッハー＝マゾッホは，‹Gandscha› と綴っていたであろう[41]。

「ラファエロの聖母」[42] を彷彿させるハンジャから，幼児期に受けた影響がいかに強く，また深いものであったかをザッハー＝マゾッホは繰り返し語っている。

> 私に素晴らしいロシアの昔話を語ったり，私を寝かしつけながら，小ロシアの民謡を歌ってくれたのも彼女であった。そしてそれらは，私の感情世界，そして私の後の作品に刻印されるのである。[43]

> 私の乳母が語ってくれた昔話，彼女が歌ってくれた民謡が，私の考え方，私の感情生活，そして私の性格に，その後のすべての勉学以上に深い影響を与えた。それらは古典文学，ギリシャ・ローマの作家たち以上に，そしてベートーヴェンやモーツァルトの音楽，ラファエロやルーベンスの絵画以上に強く私の想像力を形作った。[44]

ザッハー＝マゾッホがモーツァルトと同じ誕生日に生まれた偶然を，祖父はことのほか喜んだようである[45] が，ザッハー＝マゾッホの「考え方」，「感情世界」，そして「性格」を形成したのは，モーツァルトの音楽よりはむしろハンジャが歌うウクライナ民謡であった。そして，ガリツィアの地に関しても，「私はいつも

この地方に対して，スラヴ人が自分の故郷に対して抱く，宗教的で熱烈な愛情を感じてきた。私が生まれた世界のこの一隅は，私にとってもつねに母のようなものであり，尊敬すべきもの，神聖なものであった」と告白し，さらに，「この広い野原，金色に輝く穂の海，ステップ，草と木からなるこの大洋，彼方で空へと消える平原，カルパチアの岩山と樹齢数百年の樅の木々，かつては海の波が砕け散っていたその裾野，こうしたすべてを目にしたことのない者は，このような愛も，ロシア的性格もいつまでも理解できないだろう」[46]，とその愛が語り難く，他者とは共有し難いものであるとつけ加えている。「後の勉学で身につけた」ドイツ語（一部はフランス語）で作品を著したにもかかわらず，ザッハー＝マゾッホは，自覚においては終生，ウクライナ人であった。モーツァルトの音楽よりウクライナ民謡のほうが親しいものであったように，ザッハー＝マゾッホにとってはアルプスよりもカルパチアのほうが美しいのである。

> 果てしない平地は詩趣と魅力に富んでいるが，カルパチアの山々もまたそれに勝るとも劣らない。そこの原始林あるいは岩地には，また別の，胸に迫る荘厳とメランコリーが存在する。平地から直接に迫り上がる数千フィートの岩壁，枯れた山頂，花崗岩の柱，森と草地，150～200 フィートに達する黒樅，泡立つ小川，大気を野生の花々の香りと澄んだ爽やかさで満たしながら勢いよくほとばしる渓流，こうしたものを抱えた重厚な山塊，一方にはサルマチアの平原，他方には葡萄畑に覆われたハンガリーの丘を眺望することのできるチョルナ・ホラからの絶景，これらはスイスやチロルのアルプスよりも美しい。[47]

そしてカルパチアがアルプスよりも美しく保たれているのは，「この地が未だ邪悪な文明に汚されてこなかった」からであり，「ここには鉄道も，たえず欠伸ばかりしているイギリス人で満員のホテルもなく，チップほしさに手を伸ばしてくる勇敢な登山案内人もいないからである。ここではいまだに至るところで自然が脈打っている」[48] からであり，下界のツーリズムがいまだここまで及んでいないからであった。

作者，すなわち「ガリツィア出身の小ロシア人ザッハー＝マゾッホ」は，少なからず自らの分身であるはずの語り手「ザッハー＝マゾッホ」に，「邪悪な文明」の戯画である，都会からやって来たポーランド人ツーリストたちの，月並みで空疎な賛辞に唱和させるわけにはゆかなかった。

4.

ザッハー＝マゾッホは，『ハイダマク』においてフツーレの民族誌やカルパチ

アの風物詩を企てたわけではない。『ハイダマク』という作品は枠物語の構造をもち，かつてハイダマクであったミコライが語り手となって物語の中に物語を開くとき，この作品は主客を転倒する。枠の外側では，ポーランド人ツーリストたちの眼差しの前でひたすら受動的に鑑賞され，観察されるだけの客体に過ぎなかったミコライがここでは主体を取り戻し，物語の雄弁な主人公となる。

「もっとハイダマクのことを教えて欲しい」[49] と教授に懇願され，ミコライは，ハイダマクについて，自らの生涯について，「大胆な盗賊の精神」[50] について語り始める。ハイダマクは，一般には，18 ～ 19 世紀にカルパチア山中を根城にした義賊であるとされているが，しかしミコライは，ハイダマクを，「人間を抑圧する者に対する憎しみと自由への愛から山へやってくる若者」であり，「反逆者」[51] であると定義し，「1 万人以上の農民を糾合し，貴族を殺戮した」[52] 15 世紀のムハ，「チェヒリンの知事に財産と妻を奪われ，ポーランドの裁判所と王に権利を申し立てたが埒があかず，コザックとともに襲来し，数々の戦いでポーランド人たちを倒した」[53] 17 世紀のフメリニツキ，「隷属の鎖を断ち，すべての人間を平等，自由にしようとし，女帝エカテリーナをも震え上がらせた」[54] 18 世紀のプガチョフ，「およそ 5 万人の貴族を殺し，門に釘付けにし，火中に投げ込み，殺害の数が増えると，数百人ずつ首まで土中に埋め，まるで穀物のようにその首を刈り取ったウクライナの反逆者たち，すなわちフマニの戦いの英雄たち」[55] を挙げ，彼らこそがハイダマクであり，「ドンやドニプル河畔のステップでは，彼らはコザックといわれ，平地，沼地，森，そして山地では彼らはハイダマクと呼ばれた」[56]，とその概念を広げる。

ミコライが祖父から聞いた「私たちの民族」の歴史によれば，「何百年も前には貴族というものはいなかった。誰もが農夫か牧人であった」のであるが，「そこに白い舟に乗ってドイツ人たちが，また黒い馬に乗ってポーランド人たちがやってきた。彼らとともに貴族も私たちの国にやってきた。そして侯爵たちもやってきて，国中が彼らに従わなくてはならなかった」という。それに続くポーランド王国の支配下では，「当時私たちの民族は，ポーランドのシュラフタに隷属させられ，抑圧されていた。貴族は，馬をいたわるために農民に犂を引かせ，罰も課さずに殺すことさえ許されていた」[57] のであった。ミコライが簡潔に要約しているのは中世から 18 世紀にいたるウクライナ人の歴史であり，フランツォースであれば，これを「ポーランド人対ウクライナ人」という民族間の対立に還元し，救いのないウクライナ人の民族解放の物語を紡ぐところであろう[58] が，ザッハー＝マゾッホは，ガリツィアで繰り広げられる闘いを，「持てる者と持たざる者」の対立，すなわち階級間の抗争，所有権（Eigenthum）を巡る闘争として描く。『ハイダマク』を収める短編集のタイトルが『財産』（Das Eigenthum）であったことをここで想起するなら，『ハイダマク』のテーマが，物語中の物語をなす，ミコライの語りのなかにあることは明らかである。

ミコライは,「かつて，暴力，略奪，流血以外のやり方で財産と富にありついた者があっただろうか」[59] と財産の起源を問い,「いま貧しい者たちに向かってたいへん立派な法律を与えている侯爵，伯爵，領主たちがすべて盗賊以外の何者でもなかったのは百年と昔のことではない」[60]，と持てる者の身勝手極まりない一方的な論理を暴く。「これらの盗賊領主たち」は，暴力と略奪の限りをつくし，持てる者，富める者となったとたん,「これからは盗みを働いてはならない」,「今後，力ずくで他人の財産を奪う者は絞首刑だ」[61] と宣言したのである。すなわち，財産の起源が盗賊の起源である, とミコライは論証する。そして「財産」は「利欲」（Gewinnsucht）を生み,「そこから窃盗，略奪，詐欺が生まれ，財産を所有する者たちが，父から息子へと相続するという制度によってそれがさらに増加した」[62]，とミコライは不正の連鎖を辿る。詰まるところ,「財産によってあらゆる不幸がこの世にやってきた」[63] のである。

なかでも, この世を最も不幸にした財産は, 土地所有である, とミコライは言う。

> もしある人が飢えに苦しみ，たとえばたった一つ果物をもぎ取ると，彼はそれだけで即座に泥棒，犯罪者とされてしまう。まるで神がこの大地をすべての人のために創造したのではなかったかのようだ。森で木を一本切り，たとえば火薬筒を作ったり，あるいは，藁を拾い集めて帽子を編むとき，それは泥棒とは別の事柄である。ある人が自分で作り出したと言えるものはその人のものである，ということに対しては誰も異議を唱えないであろう。だが，そこに生えているもの，飛んでいるもの，這っているもの，こうしたすべては神がすべての人のために創造されたものであり，そこに誰かがやってきて，一片の土地に自分専用に境界線を引くとき，それは大いなる不正である，と私は考える。[64]

ここにザッハー＝マゾッホは,「事物に対して行使された労働（Arbeit）のみが所有権（Eigenthumsrecht）に根拠を与える」[65] という,『財産』全体のエピグラフに用いたショーペンハウアーの言葉を注として振り，そのことはミコライも重々承知しているので，彼も「他人の金銭，他人の衣服などを奪うことは，大いなる罪とみなすであろう」[66] と述べる。この注は，ミコライも「所有権」に関して無知ではなく,「所有権＝財産」を尊重していると述べているように見えるが，しかし，ここに引かれた所有権に関するショーペンハウアーの見解は，逆に，労働が行使されていない「大地」と「そこに生えているもの, 飛んでいるもの, 這っているもの」は，神が「すべての人のために創造した」ものであり,「他人の森で木を切り，動物を射ること，自分の牛を他人の牧草地に連れて行くこと，あるいは他人の果物を採ることには良心の呵責を感じない」ミコライの，遊牧的「共

産主義」[67] を擁護し補強している。

「一片の土地に自分専用に境界線を引く」こと，すなわち土地の所有が「大いなる不正」であるのは，それがそもそも神によって「すべての人のために」創造されたものであるからである。それにもかかわらず「大地はいかに不公平に配分されていることか」[68]，と嘆息し，いつまでも「貧しい者たちはそれを甘受していなくてはならないのだろうか」[69] と自問した末にミコライがたどり着いたのが，「大胆な盗賊の精神」，すなわち「血の復讐」[70] であり，かつて貴族の祖先たちが「財産と富にありついた」ところの手段，すなわち「暴力，略奪，流血」であった。

ミコライは，税金も教会の寄付も払えない貧しいフツーレの農民の家に生まれた。わずかな畑と菜園と数本の果樹が財産のすべてであった。父親の葬儀のためにも，ユダヤ人から金を借りねばならず，「生まれて洗礼を受けるのにも」，「妻を持つにも」，「死んで葬られる」にも金がかかる[71] この世の制度の矛盾をミコライは思い知らされる。そして，「森のなかで，蟻が蝸牛や甲虫を捕らえ，苦しめながらゆっくりと殺し……，狐が，まどろんでいる兎を絞め殺し，鷹が小鳥を屠っている」[72] のを見るうちにミコライは，「他のものを破壊することなく生きることのできるものを神は何一つとして創造しなかった」[73] という神義論にたどり着く。

> 神は世界を，現にあるがままに創造されたのだ。そしてご自身の考え通りに，正しく創造されたのだ。従ってあるがままで正しいに違いない。戦争が起こり，殺人があり，略奪あり，ある動物がほかの動物を屠り，ある人が他の人を，ある民族が他の民族を屠るとき，すべては神の意志によって起きているのだ。なぜなら違ったようにあって欲しいと神が欲するならば，違ったようになるだろうから。
>
> 私たちはこの世界に置かれたのだ。それがすべてだ。自らを助けよ。動物が戦うように戦い，他人を押さえつけ，相手から空気と光を奪え。ちょうど森で一本の木が他の木に対してそうするように，相手が死に絶えるまで。[74]

そのような神義論に立つとき，「汝殺すなかれ，汝盗むなかれ，汝，隣人の不利になる証言をすることなかれ，隣人の家を欲するな，隣人の妻を欲するな，すべて隣人のものを欲するな」[75] という「説教台の神父たち」[76] の戒律は，「金持ちによって貧しい者に対して」，「飽食した者によって飢えた者に対して」，「彼らが悲惨さのなかから反抗しないように」述べられているに過ぎず，「これらの戒めは，主が私たちすべてのために書かれ，周りに開かれている偉大な書物のなかに読むことはできない」[77] とミコライは断ずる。ミコライが神の「偉大な書物」，すなわち自然のなかに読み取ったのは，それとは逆のこと，すなわち，「至る処

に書かれているのは，汝は殺さなくてはならない」[78]，カインの末裔として，「汝は殺さなくてはならない」，という闘争の有理であった。

> 私たちはみな，自分の弟の血を流したカインに由来し，そこから逸れてはいないように見える。さもなくば，この世に戦争などあろうはずがない。[79]

父の葬儀に借りた費用を返済できずにユダヤ人に家を取り上げられ，それを気に病み母が他界したとき，ミコライにはすでに母の葬儀のための費用はなく，夜一人で母の亡骸を山に運んで葬ると，以前，埋めておいた銃を掘り起こし，自分の家と畑に火を放ち，ドボシュの配下に身を投じ，ハイダマクとなるのである。ドボシュは当時，「役人たちの不正，貴族の傲慢，ユダヤ人たちのあくどい取引，当時貧しい人々を苦しめていたこうしたすべてのことに憤り」，「大胆で勇敢な若者たちを引き連れて山へ入り，抑圧者たちに宣戦し」，「山のすべてのハイダマクたちのアタマン，チョルナ・ホラの裁判官」[80] として，抑圧者たちから恐れられていた。ミコライは，青春の一時期を，ドボシュとともに，非道な役人，僧侶，地主，貴族たちに対する「血の復讐」に捧げる。ミコライの物語の中にさらに，伝説に彩られたドボシュの生涯が織り込まれる。流星となってコスマチに舞い降りた妖女ズヴィンカの奸計でドボシュが命を落とすと，一党はドボシュの遺言に従って解散する。ミコライは，ふとした偶然から知り合った，語り手「ザッハー＝マゾッホ」の叔父に山を下るように説得されるが，それを謝絶して再び山中に戻りハイダマクにとどまる。しかし，「1848 年に隷属と賦役が廃止され，農民が自由になり，自ずと戦いも終わり，……ハイダマクたちも山の隠れ家を棄て，武器を棄て，講和を結んだ。」[81] ミコライも「世間と折り合いを付け」[82]，「森を買い，家を建て，人々からは隔絶して，犬と馬とともに」[83]，平和な山中に暮らすようになったのであった。

「カインの息子たちよ」，とミコライは聞き手たちに呼びかけ，「あなたがたはいっそう賢くなり，穏やかなやり方で互いに排除し合っている」[84] と下界の人間たちを非難する。「確かに今日では，人々は互いに武器を向け合うことはまれだ。流血を目にすることもない。しかし，人々は，手形証書，利息，詐欺まがいの商売，差し押さえによって互いに殺し合っている」[85]，とミコライは，相変わらず下界では殺戮が続いていると指摘する。同じことをザッハー＝マゾッホは，『財産』の「序」で，「人間は自然に近ければ近いほど，それだけ動物的な本能，激情に囚われており，もしそれを満足させ，他人の幸福を破壊することが必要になると，それだけいっそう恐ろしい形をとることになる。人間が文化によって，自然から遠ざかれば遠ざかるほど，彼の利己心は制約を受け，そもそもは野蛮で血生臭い，生存のための戦いは，それだけいっそう柔らかい形をとる」[86] と言い換

えているが，今，ミコライの目に映っている下界は，「柔らかい形をとった」殺戮，文明の名のもとでの「殺し合い」である。

神が「すべての人のために創造した」自然であるところの大地を耕作し，すなわち労働を行使し，「計測」し，「計算」し，「自分専用に境界線を引」き，自らの「名を付け」所有する「大いなる不正」は，「地を耕す者」カインに由来し，それがカインの息子たちの「野蛮で血生臭い，生存のための戦い」の発端であり，オクシデントの略奪と殺戮と戦争の歴史の発端であった。耕作（cultura）によって自然から遠ざかったオクシデントの文化（Kultur）は，数千年を経て，「野蛮で血生臭い」殺戮を，「柔らかい形を取った」殺戮に変えただけであった。その結果オクシデントには，「まるで私たちの足下から深みへと砕け落ちる岩石のように風化した，疲弊したヨーロッパがあり」，「自分の弟の血を流したカイン」の息子たちであるところの「病んだ諸国民」が「老齢と富につきものの苦しみ」を病んでいる。『ハイダマク』を含む短編集『財産』は，さらに大きな，全 6 部からなるはずであったが実際には第 2 部までしか完成されることのなかった連作『カインの遺産』（Das Vermächtnis Kains）の第 2 部をなすものであるが，『ハイダマク』で語られる「疲弊したヨーロッパ」の諸国民の病と苦しみのすべては，「財産」の所有に起因する「カインの遺産」であった。

5.

『財産』の「序」でザッハー＝マゾッホは，『カインの遺産』の根本思想の一つを，「我々が生きるこの世界は，ライプニッツが証明しようとしたように，考えられる限り善なのではなく，考えられる限り悪なのである」という言葉によって表現し，さらに，「創造者は，完全な善ではなかったのかも知れない。そうではなく逆に，あらゆる存在のなかで最も悪意に満ち恐ろしいものであったのかも知れず」，「自然と人間とは，……初めから悪なのだ。……とくに人間は，自分の周辺と永続的な戦争状態に置かれている。……この呪われた種族は，カインのように自分の弟を殺し，奪い，自分の奴隷にしようと絶えず努力しながら，おのおのが他人の犠牲で生きようとする」[87]，と続ける。この根本思想は，ミコライが「大胆な盗賊の精神」として語ったところであった。人間が生まれながらに悪であり，この呪われた種族を永続的な戦争状態において描くことは，しかしペシミズムに基づくものではないし，ペシミズムに寄与するものでもない。なぜなら，「詩人はペシミスティックな憂鬱の頂点で，彼に進むべき道を示すことを約束する星を認め，自分と自分の兄弟たちのための真実を求めて，忠実にそれについて行く」[88]からである。ザッハー＝マゾッホが，「わが種族の唯一の道徳的導きの星」[89]と呼ぶのが，「二つめの根本思想」，すなわち，人間の「進歩」と「発展」に対する楽天的とさえ見える信頼である。

> 人間はそれでも自分の本来的な野獣的素質にとどまることはなく，むしろ自らの精神と認識の発展によって次第に自然を超え，自然を人間に従わせ，何千年にもわたる戦いのなかで次第に自分と，自分の創造的な力の主人となって行く。（……。）進歩的，精神的，そして道徳的発展と，人間が自分の力で自らを高めてゆくというこの思想，すなわち，人間が緩やかに自然を純化してゆくことは，いっそう偉大で，崇高で，感動的な思想ではないだろうか。人間の本性は初めは善であったが，神に背くことによって堕落したとする失楽園の教説は，むしろ本来的に希望がなくペシミスティックな思想ではないか？人間を，すばらしい世界，調和のとれた，神的で道徳的な世界秩序の攪乱者とするこの考え方によって，人間の道徳的自信は重圧を加えられるのに対して，人間こそが，自分自身と周りの自然の，弛むことない，そして成功を約束された改良者であり純化する者であるという確信は，人間を高め，これからの戦いと前進，精神的・道徳的征服に向けて鍛え，鼓舞するのではないだろうか。[90)]

人間を，悪から善への「道徳的発展」の途上にあると捉えるとき，「詩は，形象に満ちた『人間の博物誌』(Naturgeschichte des Menschen）でなくてはならない」(強調は著者)，とザッハー＝マゾッホは，文学の「道徳的課題」を述べる。「人間の博物誌」とは，人間の生態をあるがままに描き，文学の中において「展示」するということである。したがって，「芸術の理想主義は，芸術の対象において露出してはならない。人間も，その内的・外的生活も理想化されてはならない」[91)]のである。このときザッハー＝マゾッホは，「道徳的」リアリズム作家として，「いかがわしい場面を避けるのではなく，愚かさと悪に満ちたこの世をあるがままに描き」[92)]，「人間の愚かさ，悪，激情のカオスの上に，私たちが前進する道を示し，真理の永遠の光を灯す」[93)]ことを自らの課題とする。

『ハイダマク』の結末において，「わが種族の唯一の道徳的導きの星」，「真理の永遠の光」は語り手「ザッハー＝マゾッホ」の視線を，カルパチアが繋ぐ「二つの世界」の一方，オリエントへと導く。そこでは，「若々しい曙の諸民族が，創造の胸元に優しく抱かれ，その秘密の鼓動に無垢の感覚でもって耳を傾け，自然の必然と，永遠に変わることのない人類の運命の感情に満たされ，記憶に苛まれることも過去に怖気を振るうこともなく，また，儚い希望を抱くこともなく，しかしまた恐れと疑いを抱くこともなく未来を見つめている。」そこでは人間の内なる自然も周りの自然も純化され，人間はイシスの胸元に優しく抱かれ，「自然の必然」と調和して生きている。自然は所有されることもなく，したがって，略奪も殺戮も戦争も存在せず，人間は「恐れと疑いを抱くこともなく」，平和のうちに生きている。

だがこのオリエントは幻であった。語り手の「私」は，我に返ると，一行から遅れ，「まるで岩たちの石の抱擁に捉えられたように，呪縛されて佇んでいた」[94] ことに気づく。足下に目をやると，「はるか下の方には，財産，戦争，憎悪，殺人，苦業，そして略奪があり」[95]，そして山上には「平和」があった。

> 老ハイダマクが語ったことは真実であった。山中には平和（Friede）がある。風化した石に生えたわずかな苔以外には生き物のいないここには，平和，そして静寂（Ruhe）がある。ここでは人間の心は鼓動し続けることはできない。なぜならば，心臓の鼓動は闘争であり，諍い（Unfrieden）であり，騒擾（Unruhe）であり，狩猟であるからだ。[96]

「しかし何のために？」[97]，と語り手は自問する。枠物語の中に注意深く封印されたミコライの「大胆な盗賊の精神」がその答えであった。人間の，そして生物の戦いは，「生存のための戦い」であった。そして山上の「平和」は，「死」のもう一つの名であった。自然が「石の唇」を借りて語り手に語りかける。

> ここで生物の国は終わる。人間よ，おまえの狭い限界を見よ，私はここを支配している。ここで働いているのは，悠久の，自然の力（die urewigen elementarischen Gewalten）である。死の顔を見よ，おまえがやってくる前から永遠に存在し，おまえが去った後にも無限に存在するであろう死の顔を。[98]

生存のために戦わねばならない生物の世界が果てるところ，そこから平和と静寂が始まる，と自然は語っているのである。「平和」が「死」の異名であるならば，「戦争」は「生」の異名であった。「平和」が「生」のもう一つの名となるところ，それが，オリエントに語り手が幻視した世界，「真理の永遠の光」が指し示した，人類の理想の世界，未来の姿であった。

ザッハー＝マゾッホのカルパチアは，生と死，文化と自然，戦争と平和，現実と理想，過去と未来，ペシミズムとオプティミズムの境界に横たわり，「二つの世界」を繋ぎとめている。

オクシデント，すなわち「疲弊したヨーロッパ」の，「邪悪な文明」の世界からやって来たツーリストたちは，「本物のフツーレの家」を見学し，「本物の」ハイダマクを鑑賞し，「本物の」盗賊の口から直に体験談を聞き，「本物の」フツーレ馬に乗り，カルパチアの自然と，チョルナ・ホラの勇姿を満喫し帰途に着く。

「さあ，下ろう，カインの種族のもとへ。」[99]

【注】

1) Andruchowytsch, Juri: Carpathologia Cosmophilica. Versuch einer fiktiven Landeskunde. In: Ders: Das letzte Territorium. Aus dem Ukrainischen von Alois Woldan. Frankfurt/Main (Suhrkamp) 2003, S. 17
2) Ebd., S. 16
3) Ebd., S. 19
4) Ebd., S. 27
5) Ebd., S. 18
6) Ebd., S. 19
7) Ebd., S. 16
8) Ebd., S. 27
9) Sacher-Masoch: Der Hajdamak. In: Ders.: Das Eigenthum. Erster Band. Bern (Georg Frobeen & Cie) 1877, S. 301 f. エジプトの女神イシスは，創造と自然の象徴であり，アプレイウス『黄金のろば』においては,「私は万物の母, あらゆる原理の支配者, 人類のそもそもの創造主，至上の女神，黄泉の女王，天界の最古参にして，世界の神々や女神の理想の原型」（呉茂一・国原吉之助訳，岩波文庫，1976 年　下巻 145-146 頁）と名乗りをあげている。
10) Andruchowytsch, S. 12
11) Ebd.
12) Ebd., S. 16
13) オレクサ・ドウブシ（Довбуш, Олекса 1700-1745）は，チョルナ・ホラ山麓を拠点に活躍した，ウクライナのロビン・フッドといわれる義賊のリーダーであり，今日に至るまで，さまざまな伝説，小説，詩，演劇，美術，音楽，映画の素材となってきた。ザッハー＝マゾッホは，ドウブシの生涯を，実際より 100 年ほど後にずらし，‹Dobosch›（ドボシュ）の名で，『ハイダマク』に登場させる。
14) 現在のウクライナのリヴィウ（Львів）。「ルヴフ」（Lwów）はポーランド語。ドイツ語ではレンベルク（Lemberg）。ザッハー＝マゾッホはポーランド語表記を好み，『ハイダマク』においても，‹Lwów› としているが，本稿では，他の引用文献とも整合させるため，引用以外では「レンベルク」を使用する。
15) Der Hajdamak, S. 176
16) Ebd., S. 177
17) Ebd., S. 179
18) Ebd., S. 177「ジャビエ」（Żabie）は現ウクライナのヴェルホヴィナ（Верховина）。
19) Woldan, Alois: Die Huzulen in der Literatur. In: Beitl, Klaus (Hrsg.): Galizien. Ethnographische Erkundung bei den Bojken und Huzulen in den Karpaten. Schloss Kittsee 1998, S. 154 f.
20) Ebd., S. 156
21) Sacher-Masoch: Magaß, der Räuber. In: Ders.: Galizische Geschichten. Bern (Georg Frobeen & Cie.) 1877, S. 10.『クラクフ人と山岳民』（„Krakowiaki i Gorali“）の作者名は挙げられていないが，タイトルから，この演劇は，おそらくボグスワフスキ（Bogusławski, Wojciech 1757-1829）の『信じられた奇蹟，あるいはクラクフ人と山岳人』（Cud mniemany, czyli Krakowiacy i Górale. 1794 年ワルシャワ初演）であろう。
22) Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort un Bild. Galizien. Wien (Druck und Verlag der kaiserlich-königlichen Hof- und Staatsdruckerei) 1898, S. 883 f.

23) Grieshofer, Franz: Die Bedeutung des Ausstellungswesens für die Entwicklung der Ethnographie in Galizien und Wien. In: Beitl, ebd., S. 19 f.
24) Ebd., S. 21
25) Ebd., S. 22
26) Der Hajdamak, S. 183 f.
27) Ebd., S. 187 f. かっこ内に補った原註は，原本では巻末に付されている。「アルナウテン」は，アルバニア人を表すトルコ語による古称。
28) Ebd., S. 191 f.「リクトルの斧」（Beil der Lictoren）とは，古代ローマにおいて高位高官の先導を務めた先駆吏「リクトル」（lictor）が掲げていた「束桿斧」（fasces）を指す。束桿斧は，斧の周りに棒を巻き束ねたもので，権威，国家権力，団結の象徴となった。ムッソリーニが 1919 年に創設した私的軍団「闘うファッシ」（Fasci di Combattimento）の名称とエンブレムに使用したことから，束桿斧はファシスト（fascista），ファシズム（fascismo）の語源となった。
29) Vorwort zu „Das Eigenthum“, S. 5
30) Dreesbach, Anne: Gezähmte Wilde. Die Zurschaustellung ›exotischer‹ Menschen in Deutschland 1870-1940. Frankfurt/New York (Campus Verlag) 2005, S. 44 f. この箇所は，ハーゲンベックの自伝 „Von Tieren und Menschen. Erlebnisse und Erfahrungen“ (Berlin 1908) からの引用である。
31) Ebd., S. 14. ドレースバッハによれば，「本物の『日本人』（Japanesen）による日本展示」が，1885 年と 1887 年にミュンヒェンの水晶宮（Glaspalast）で行われ，1885 年には, 8 月 29 日から 10 月 11 日にかけて, 71 人の日本人（男 49 名, 女 16 名, 8 ～ 10 才の子供 5 名, 生後 6 週間の女児）が展示されたという。（Vgl. ebd., S. 99, S. 231 f.）
32) Der Hajdamak, S. 192 f.
33) Dreesbach, S. 150 f.
34) Der Hajdamak, S. 196
35) Schlichtegroll, Carl Felix von: Sacher-Masoch und der Masochismus. In: Ders.: Sacher-Masoch. München (belleville) 2003, S. 88
36) Sacher-Masoch: Souvenirs. Autobiographisches Prosa. Aus dem Französischen von Susanne Farin. München (belleville) 1985, S. 87
37) Ebd., S. 23
38) Ebd., S. 21
39) Ebd., S. 77
40) ザッハー＝マゾッホが ‹Handscha› とラテン文字に転写した乳母の名前はウクライナ語では ‹Гандзя›，仮名で記せば「ハンジャ」である。ザッハー＝マゾッホが，‹dsch› で表しているのは ‹tsch› の有声音である。「ハンジャ」というウクライナ人の女性名は，たとえばザッハー＝マゾッホの同時代人で，レンベルクに近いベルディヒウ生まれのウクライナ人詩人ボンコフスキイ（Бонковський, Денис 1816-1869）が作詞作曲した „Гандзя“ によっても広く知られている。「美しいハンジャのような娘がこの世にあるだろうか」と歌う素朴な民謡調のこの曲は，クヴィトカ・ツィシク（Цісик, Квітка 1953-1998）をはじめ，さまざまな歌手，グループによって，今日もウクライナで歌い継がれている。
41) ‹Гандзя› の ‹г› は，ウクライナ語では [h]，ロシア語では [g] と発音される。
42) Ebd., S. 19, S. 61
43) Ebd., S. 23 f.
44) Ebd., S. 43
45) ザッハー＝マゾッホが生まれた日（1 月 27 日），祖父は，「偉大なるモーツァル

トの誕生日に祝福あれ！」と乾杯している（Ebd., S. 19）。モーツァルトは，当時のレンベルクのドイツ人たちにとっては特別な名前であった。ザッハー＝マゾッホが生まれた頃，レンベルクの劇場の楽長を務めていたのが，モーツァルトの二男フランツ・クサーヴァー・ヴォルフガング・モーツァルト（1791-1844）であった。母親コンスタンツェは，フランツ・クサーヴァーが 2 歳の時，天才の名を恣にした夫の遺児（フランツ・クサーヴァーが生後 4 ヶ月の時にモーツァルトは他界している）の将来を音楽家と定め，名前に「アマデウス」をつけ加え，以後，フランツ・クサーヴァーは，「息子ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト」（Wolfgang Amadeus Mozart Sohn）という重い名前を背負って生きてゆくことになる。フランツ・クサーヴァーは，1808 年，17 歳の時に，レンベルクの東 90 キロほどのところにあるポドカミエニ（現ウクライナのピドカミニ）のポーランド貴族のもとへ音楽教師として雇われ，ガリツィアへやってくる。1811 年にレンベルクに移り，自由な音楽家として，作曲，ピアノ教師，コンサートなどの活動を行うが，1826 年に，クラシック音楽の教育・普及と演奏のために，「ツェツィーリア協会・ツェツィーリア・コーラス」を創設する。会員 405 名の大部分はレンベルク在住のオーストリア帝国の官吏とその家族であったというから，ザッハー＝マゾッホ家も当然その会員であったはずである。しかしツェツィーリア協会は，会員の転勤などのため長続きせず，1829 年には解散してしまう。その後 1834 年にフランツ・クサーヴァーはレンベルク劇場の楽長という定職を与えられる。1838 年にガリツィア総督の庇護のもと，レンベルクに再び音楽協会が作られ，その管理を引き受けたのが，作家ザッハー＝マゾッホの父，警察長官レーオポルト・フォン・ザッハー＝マゾッホであった。その翌年，フランツ・クサーヴァーは，レンベルクを去り，ウィーンに移っている。-Vgl. Hummel, Walter: W. A. Mozarts Söhne. Kassel und Basel (Bärenreiter-Verlag) 1956. Röskau-Rydel, Isabel (hrsg.): Deutsche Geschichte im Osten Europas. Galizien. Berlin (Siedler) 1999. Angermüller, Rudolph: Mozart, seine Zeit, seine Nachwelt. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2005

46) Souvenirs, ebd., S. 32 f.
47) Ebd., S. 33
48) Ebd., S. 33 f.
49) Der Hajdamak, S. 227
50) Ebd., S. 250
51) Ebd., S. 229
52) Ebd., S. 230 f.
53) Ebd., S. 231
54) Ebd.
55) Ebd.
56) Ebd., S. 230
57) Ebd.
58) 伊狩裕「カール・エーミール・フランツォースとウクライナ」（同志社大学言語文化学会「言語文化」第 9 巻第 1 号 2006 年 8 月 1-47 頁）参照。
59) Der Hajdamak, S. 236
60) Ebd., S. 237
61) Ebd.
62) Ebd., S. 234
63) Ebd., S. 233
64) Ebd.

65) Ebd., S. 306
66) Ebd.
67) Ebd.
68) Ebd., S. 235
69) Ebd., S. 237
70) Ebd., S. 230
71) Ebd., S. 251
72) Ebd., S. 250 f.
73) Ebd., S. 241
74) Ebd., S. 239
75) Ebd., S. 240
76) Ebd., S. 241
77) Ebd., S. 240
78) Ebd.
79) Ebd., S. 239
80) Ebd., S. 257「アタマン」（Ataman）は首領の意味。
81) Ebd., S. 291
82) Ebd., S. 288
83) Ebd., S. 291
84) Ebd., S. 242
85) Ebd., S. 241
86) Vorwort, S. 35
87) Ebd., S. 39 f.
88) Ebd., S. 39
89) Ebd., S. 42
90) Ebd., S. 40 f.
91) Ebd., S. 36
92) Ebd., S. 31
93) Ebd., S. 36
94) Der Hajdamak, S. 302
95) Ebd.
96) Ebd., S. 302 f.
97) Ebd., S. 303
98) Ebd.
99) Ebd.

Die Karpaten von Sacher-Masoch – Anhand der Novelle „Der Hajdamak“

Yutaka Ikari

Die Novelle „Der Hajdamak“ (1877) von Sacher-Masoch (Leopold von, 1836-1895) spielt in den Ostkarpaten in Galizien. Sie beginnt am Fuß der Karpaten. Drei Polen aus Lemberg, der Landeshauptstadt von Galizien, besuchen den Erzähler namens „Sacher-Masoch“, der dort wohnt. Es sind die junge Polin Lola, ihre Begleiterin Lodoiska und als ihr „Kavalier“ ein älterer Professor mit einem „Sokrateskopf“. Das Ziel der Polen ist es, die Tschorna Hora (den schwarzen Berg) in den Karpaten zu sehen. Mit dem Erzähler und dessen Kollegen gehen sie zuerst zu einem ehemaligen Hajdamak (Bergräuber), dem Huzulen Mikolaj, der in den Bergen wohnt. Mikolajs huzulische Tracht und sein Haus besichtigen die polnischen Touristen aufs Genaueste von außen und innen und verhalten sich dabei wie die Besucher einer Ausstellung: Mikolaj ist für sie nur eine Sehenswürdigkeit, ein exotisches Objekt. Mit der ironischen Schilderung dieses Verhaltens scheint die Erzählung den Exotismus und den Tourismus in Europa der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts zu karikieren.

Galizien und die Karpaten waren die Heimat des Autors Sacher-Masoch. Er wurde als Kind eines deutschen Beamten der Habsburger Monarchie – sein Vater war Polizeidirektor – und einer ukrainischen Adelstochter in Lemberg geboren, wurde aber ausschließlich von seiner ukrainischen Amme namens Handscha aufgezogen, die er „meine zweite Mutter“ nannte. Mit ihrer Milch sog er die Liebe zu seiner Heimat Galizien ein, und das Ukrainisch wurde seine erste Sprache. Er schreibt in „Souvenirs - Autobiographische Prosa“: „Die Märchen, die mir meine Amme erzählte, die Volkslieder, die sie mir vorsang, haben meine Art zu denken, mein Gefühlsleben und meinen Charakter tiefer beeinflußt als alle späteren Studien. Sie prägten meine Imagination in stärkerem Maße als die klassische Literatur, die griechischen und römischen Autoren, stärker auch als die Musik Beethovens und Mozarts und als die Bilder von Raphael und Rubens.“ Eine wichtige Rolle in seiner Heimatverbundenheit spielten auch die Karpaten: sie waren für Sacher-Masoch „schöner als die Schweizer und Tiroler Alpen“. Dies zeigt sich auch in der Erzählung „Der Hajdamak“. Der Erzähler, das zweite Ich Sacher-Masochs, steht der banalen Reaktion der polnischen Touristen aus der Großstadt kalt und distanziert

gegenüber.

Das eigentliche Thema der Novelle sind jedoch nicht die Karpaten und die ethnographische Beschreibung des Huzulen. Die Besichtigungsreise der Polen ist nur die Rahmenhandlung der Novelle. Die Binnenhandlung besteht ausschließlich aus Mikolajs Erzählung, in der er eloquent über seine Kindheit mit den armen huzulischen Eltern, seine Jugendzeit mit dem Ataman (Hauptmann der Hajdamaken) Dobosch und seinen „kühne[n] räuberische[n] Sinn“ berichtet. Nach Mikolaj war „die Erde (...) frei in alten Zeiten, aber durch das Eigenthum ist alles Elend in die Welt gekommen“. Durch das Eigenthum sei die Gewinnsucht entstanden, darauf folgten der Raub, die Gewalt, der Mord und der Krieg. Mikolaj sieht darin jedoch den Willen Gottes („es gibt kein Geschöpf Gottes, das da leben könnte ohne ein anderes zu zerstören“). Die Naturwelt, wo der Schwache dem Starken zum Opfer fällt, habe auch ihn dazu bewegt, zu kämpfen um zu leben. In der Natur habe er nämlich gelesen; „Du mußt töten“. Alle Menschen seien doch schließlich die Söhne Kains, der seinen Bruder ermordet habe. Das war sein „kühne[r] räuberische[r] Sinn“, den er in seiner schweren Jugend bekam.

„Der Hajdamak“ gehört zu der Novellensammlung „Das Eigenthum“, die wiederum der zweite Band des größeren sechsbändigen Zyklus „Das Vermächtnis Kains“ ist, den Sacher-Masoch allerdings nur noch bis zum zweiten Band vollenden konnte. Im Vorwort zu „Das Eigenthum“ formuliert Sacher-Masoch zwei Grundgedanken von „Das Vermächtnis Kains“. Der erste heißt: „diese Welt in der wir leben ist ... die möglichst schlechteste. ... dieser Schöpfer ... wäre ... das boshafteste und grausamste aller Wesen. ... Die Natur und der Mensch sind ... von Haus aus böse. ... In der Luft wie im Wasser und auf der Erde kämpft alles Todte und Lebendige ununterbrochen den Kampf ums Dasein. Der Mensch insbesondere liegt im immerwährenden Kriege mit seiner Umgebung und ein jeder dieses Geschlechtes sucht auf Kosten des Anderen zu leben, unablässig bemüht, gleich Kain, seinen Bruder zu morden, zu berauben, zu seinem Sklaven zu machen“. Das drückt sich in Mikolajs „kühne[m] räuberische[n] Sinn“ aus.

Aber dieser Gedanke beruht weder auf dem Pessimismus, noch trägt er zu ihm bei; denn „der Dichter erblickt auf dem Höhepunkt seiner pessimistischen Schwermuth den Stern, der ihm den Weg zu weisen verheißt, und folgt ihm mit treuem Herzen, um für sich und seine Brüder die Wahrheit zu suchen“. Dieser Stern ist der zweite Grundgedanke von „Das Vermächtnis Kains“.

Er lautet: „der Mensch bleibt jedoch bei seiner ursprünglichen bestialischen Anlage nicht stehen, sondern erhebt sich vielmehr durch die Entwicklung seines Geistes und seiner Erkenntniß allmälig über die Natur, unterwirft sie sich und macht

sich in dem Ringen von Jahrtausenden immer mehr zum Herrn seiner selbst und seiner schöpferischen Kräfte“. Es ist „der Gedanke der fortscheitenden, geistigen und sittlichen Entwicklung und Erhebung des Menschen aus sich selbst heraus“. Zugleich ist es der Glaube an den Menschen, „daß gerade er (der Mensch) der unermüdliche, vom Erfolg gekrönte, Verbesserer und Veredler seiner selbst und der Natur um ihn ist“.

Aus diesen zwei Grundgedanken folgert Sacher-Mosoch die „sittliche Aufgabe“ der Literatur. Die Poesie soll „eine bilderreiche Naturgeschichte des Menschen“ sein, und der sittliche Dichter soll diese Welt schildern, „wie sie ist, erfüllt von menschlichen Thorheiten und Lastern, zugleich aber den stetigen Fortschritt der Menschheit vom Rohen zum Edeln, von der Unwissenheit zur Erkenntnis“ offenbaren. Und er fordert vom Dichter, „über den Chaos menschlicher Thorheit, Laster und Leidenschaften ... das ewige Licht der Wahrheit anzünden, das uns den Weg zeigt, nach vorwärts.“

Dieses „ewige Licht der Wahrheit“ weist dem Erzähler den Orient auf, wo „die jugendfrischen Nationen des Aufgangs“ harmonisch mit der Natur „ohne Furcht und ohne Zweifel in die Zukunft blickend“ leben. Aber dieser Orient ist eine Illusion, die der Erzähler gebannt, „gehalten gleichsam von der steinernen Umarmung der Felsen“ sah. In Wirklichkeit war jedoch „unten (...) das Eigenthum, der Krieg, der Haß, der Mord, die Frohne und der Raub“. Frieden gab es nur in den Bergen.

Aber dieser Friede hat das Antlitz des Todes. Die Natur der Karpaten sagt dem Erzähler, der Friede beginne erst, „wo das Reich der Lebendigen zu Ende ist“, denn die Lebendigen, die Menschen sollen auf immer kämpfen um zu leben. Der Friede ist ein anderer Name des Todes, während der Krieg der des Lebens ist. Wo der Friede ein anderer Name des Lebens ist, ist der Orient, den der Erzähler in der Illusion sah.

Die Touristen kehren zufrieden mit der Natur der Karpaten zur Stadt hinunter: „Ja, gehen wir hinab, zu dem Geschlechte Kains.“